

## テロの洗礼

それは、慎太郎がリヤドに到着してから、ほんの六日後の、一月八日の夜のことだった。

慎太郎と笠原の乗った車は、ファハド大通りから一つ通りを隔てたタカシシ通りを北に向かって走っていた。通りの左手には買い物客でごったがえしているショッピングセンターが見えた。

「駱駝(らくだ)のミルクを売っている“ナタニヤ”という店はこの先です。本当にサウジ人は駱駝のミルクが好きで、これを飲むと元気が出ると言っています。一度、試してみたいかがでしょうか。最近はスーパーでも売っていることがあります。いつもあるとは限りません。その点、ナタニヤは駱駝牧場の直営店ですから一週間に三度必ず入荷します。この店には地元のサウジ人が良く買いに来ていますので、お勧めです。無農薬の野菜、果物、ジュースなど新鮮な品揃えでも評判ですし、駱駝の肉もちろん、羊の肉なども売って

います。あそこに見えてきました。あの右の店です」

と指差すと笠原はオスマにナタニヤの前で車を止めるように指示した。

車は、スピードを緩め店の前の駐車スペースに入っていた。た。

「すぐこの先に、主にサウジ人が住んでいる高級コンパウンドがあります。外国人はイタリア人、ドイツ人が僅(わず)か住んでいるだけです。外国人、特に欧米人中心のコンパウンドに比べると、安全かも知れませんか。もう遅いですから、外から見るだけですが、ついでにそこも見て行きましょうか」

笠原は車から降りながら、慎太郎にそう勧めた。

慎太郎は、連日、食料品を始め、生活必需品などの店を教えたり、住宅などを見せてくれている笠原には心から感謝していた。

「そうしましょう。遅くまでお世話になってまことに申し訳ない……」

と慎太郎が言った。

その時、

「ドーン」という大きな爆発音がして、道路がまるで地震のように揺れた。周囲の空気は一斉にサーと流れ、慎太郎は強い風圧を頬に感じた。

西の空には大きな火柱があがり、みるみるうちに黒い煙が空一面に広がっていった。

すると、遠くから、かすかな銃声が聞こえ、二つ目の爆発音がした。そして、女子供の泣き叫ぶ金切り声が遠くに聞こえた。すぐに、もう一度爆発音が響いた。

笠原は、蒼ざめた顔で、

「あれは、これから寄ろうとしていた、ムハヤ・コンパウンドの方角です」

と声を震わせながら言った。

付近の商店は、一斉にシャッターを閉め始めた。ザー、ザーというシャッターを閉める音などで周囲は騒(さわ)めき

たつてきた。

遠くからは近づいてくる、無数のパトカー、救急車それに消防車のけたたましいサイレンの音が聞こえた。

周囲は緊張感がみなぎった。

買い物客は、我先にと車に飛び乗り、あちらこちらから急発進する車の車輪の軋(きし)む音が聞こえた。あつと言う間に大きな通りも車で一杯になった。

「池波さん。すぐにホテルに引き返しましょう」

と笠原は叫び、慌てて慎太郎と一緒に車に飛び乗ると、オスマにすぐに車を走らせるよう命令した。

一般的に、サウジ人の運転は粗く、まるでスピード狂のよつに飛ばす。危険きわまりない運転だった。オスマは職業運転手だったから、多少控えめにしていたが、時折、本性剥(む)き出して運転した。

この時は尚更だった。

皆が一斉に駐車場から飛び出して、必死に自分の家に帰ろうとしていた。ただし、サウジ人にはやじ馬も多いので、中

には、爆発現場に行こうとしている車もあった。

慎太郎と笠原の乗った車は完全に渋滞に巻き込まれ身動きがとれなくなってしまった。

すると、突然、オスマが笠原に言った。

「ミスター・カサハラ、これでは身動きがとれないので最後の手段を使います。お二人ともシートベルトを締めて、アームレストに手を置いてください」

そう言うと、いきなり、車は、タイヤを軋ませ脇の歩道に片方の車輪を乗り上げた。慎太郎と笠原は慌ててシートベルトを締めた。

車は、斜めになりながら、そのまま猛スピードで走り出した。

道一杯で動けなくなった車の脇をすりぬけて走ると、時には空いた路側帯を目一杯に利用し、時には、また車輪の片方を歩道に乗り上げ、斜めになりながら走行した。その都度、タイヤが軋む音がして、いやが上にも緊張が高まった。

笠原は必死にプラスチック製のハンガーラックにしがみついて震えていた。慎太郎は、前回赴任の際にもこんなサウ

ジ人の荒い運転があつたことを思い出しながら、言われるままにアームレストに手を置いて用心深く身構えていた。

オスマはこのような走り方をロイヤルプロトコル(王室外交用)の運転手に教わつたのだと言っていたが、彼の運転には天才的どころがあつた。車はあつという間にアル・ファイサリア・ホテルに着いた。

笠原は疲れ果て顔面蒼白だった。

「あー、嫌だ。嫌だ。恐ろしいことだ。なんで僕はこんな恐ろしいところに飛ばされちゃったんでしょっかね」

そう慎太郎に嘆くと取り乱した笠原は別れの挨拶もそこそこに一目散に逃げ帰ってしまった。

慎太郎は、部屋に戻りシャワーを浴びると、急に緊張が緩み、疲れが出てベッドに横になった。すると、すぐに睡魔に襲われ、そのまま眠ってしまった。

慎太郎は、翌日のテレビニュースで、笠原が想像した通りにムハヤ・コンパウンドで自爆テロがあったことを知った。ニュースでは自爆テロにあったムハヤ・コンパウンドの住民の一人が、「今回の自爆テロで、死者が二〇人から三〇人、負傷者が五〇人から六〇人は出た」と話していた。

サウジ政府は、今回の自爆テロをアルカイダの下部組織である沙漠のサソリの仕業と断定した。

ニュースを見ながら、もう少し沙漠のサソリの攻撃が遅か

ったら、コンパウンドを外から見るともりだった自分達も自爆テロの巻き添えになっていたかもしれないと思い、冷や汗が出てきた。

早速、アルコバールの南から心配の電話が入った。慎太郎は、何も心配することはないと安心させたが、リヤドに来るのはしばらく様子を見てからの方が良いと伝えた。南は慎太郎の勧めに従い当面の訪問は控え一カ月後くらいを目処にリヤドに来ることになった。二人とも一刻も早く会いたかったが、それは止むを得ないことだった。

後に、慎太郎は、この事件による死者が少なくとも一八人で、負傷者は一二〇人以上にのぼるとの情報聞いた。死者の大部分はアラブ系の外国人だった。

五月に続く二度目のコンパウンド爆破事件は、サウジの威信を著しく傷つけた。

サード皇太子、トルキ航空国防相といったサウジのトップがテロを非難しサウジ内からテロを一掃すると宣言した。今



回のテロは攻撃対象が英米人だけではなくアラブ系の外国人にも広がっていたので、宣言の中では、特に、外国人全体の安全を確保することを約束した。

慎太郎は、欧米人のコンパウンドが警戒厳重となって攻撃が難しくなったことから、沙漠のサソリが、アラブ人が主として入っているコンパウンドはより安全と見做されていることを逆手に取ってそのようなコンパウンドを敢えて狙ったのではないかと考えていた。

沙漠のサソリは、自分達にも犠牲者が出たものの、大規模テロの成功で、まるで戦勝気分だった。犠牲となったテロリスト達を彼等のインターネット・サイト上で称え、これらの事件を、預言者ムハンマドがマッカのクライシュ族を破ったバドルの戦いに倣(なら)い、リヤドのバドル作戦と称した。

この事件により沙漠のサソリの狙いが欧米人の居住するコンパウンドだけではなくアラブ人の住むコンパウンドにまで拡大していることが明らかとなった。

慎太郎は、ますます住まい選びに慎重にならざるを得なかった。幸い、特別待遇の慎太郎は住まい選びも自由で佐々木所長からも焦らずゆっくりとしてもらって結構だと言われていた。着任後一カ月以内にホテルから一般住宅に移らなければならぬなどの規程が適用されることは無かった。

サウジ治安当局は、国王、皇太子の宣言に従い、徹底的なテロ対策を実行に移し、頻繁に、一斉捜査、家宅捜査を実施した。以降、街中では、パトカーのサイレンがひっきりなしに聞かれるようになった。

リヤドに滞在する外国人の間では不安がより一層高まっていった。

そのような中、笠原は、仕事の合間を縫い、慎太郎を連れて住まい選びなどの手助けをしてくれていた。

その日は、慎太郎の銀行口座を開設するためにサンバ(サウジ・アメリカン・バンク)まで行ってくれることになった。

「笠原君には、本当にお世話になり放しになってしまった。

助かるよ」

慎太郎は、サンバのロビーを歩きながら笠原に言った。

「どう致しまして、私は多少とも先にリヤドに来ていますし当然のことです。お役に立てて幸いです。」

「今日は、支店長に予約をとっていますから、ご紹介しながら口座開設をしましょう。サウジでは、支店長などトップに直接頼むのが最も楽な効率的方法です」

そう言うと笠原はロビーの隅にある支店長室へと慎太郎を連れて行った。

支店長室は隅の壁に手前一方を透明ガラスで仕切って作られていた。支店長は、部屋の奥のデスクに座り、その机の前に置かれた椅子に座った米国人と何やら話をしているところだった。支店長はいかにも育ちの良さそうな、色白で目鼻立ちのくっきりとした、典型的なナジド出身の顔をしていた。トーブ姿、イガール、シマーグも型通りだった。そして、丸い大きな目には銀行員らしく金縁の眼鏡をかけていた。

支店長は、慎太郎と笠原を見つけると、手招きして中に入るように促した。そして、言った。

「ミスター・カサハラ、待っていました。それでは、早速、口座開設手続きをしましょう。こちらが今日開設手続きをされるミスター・イケナミですね。始めまして、私はオバイドと言います。宜しくお願ひします」

「こちらこそ、宜しくお願ひします。オバイド支店長」

慎太郎がオバイドに挨拶すると、オバイドはつい今しがたまで話をしていた米国人にはお構いなしに、慎太郎にもデスクの前の椅子に座るように言つて必要書類を取り出すと、そこに必要事項を記入するよう求めた。手際は良かった。彼は良く出来るサウジ人の典型のように見えた。脇で笠原も慎太郎にアドバイスをしたので、すぐに書類は整った。すると、オバイドは、慎太郎からパスポート、イカマ(滞在許可証)を受け取ると、米国人、慎太郎、笠原をそこに待たせたまま、どこかに行つてしまった。

米国人は、それを笑顔で見っていたが、脇に座った慎太郎の方を向いて、

「私の名前はポール・ダグラス」

と名のると握手を求めてきた。

「初めまして、池波です。済みません。後から来て・・・」  
池波はポールと握手をしながら謝った。続いて、ポールは脇に立っていた笠原と挨拶をして握手をした。

「これがサウジ方式だからね。気にしないで良いよ。ここに  
来てから二〇年、何でも分かっているさ」

きついテキサス訛りでポールは言った。

ポールは、がっちりとした体格で一八〇センチを越す大男  
だったが、ちょっと肥満気味だった。それだけに、いかつい  
ところが消え、温厚な人柄のように見えた。そのどこまでも  
明るい笑顔と相まって、話していると大らかな人柄がひしひ  
しと伝わってきた。まるで陽気なテキサスカウボーイのよう  
だった。

カウボーイハットでも彼に被らせれば、善良で気さくなテ  
キサスカウボーイそのもののように見えたことだろう。

ポールは、サウジでの生活を楽しんでいること、気に入っ  
たサウジ人と家族ぐるみで交際していることなどをとうと  
うと喋った。慎太郎は、彼のように、サウジ人と親しんでり

ヤド生活を楽しんでいる米国人のいることはわかっていたが、実際に話をするのは初めてのことだった。

ポールは、慎太郎に名刺を渡してくれたので彼が軍事産業に係わっていることがわかった。米国とサウジは、軍事産業、石油産業での結びつきは強く、それを支えている人物がリヤドには多数居る。

慎太郎は、彼の容貌、きさくな人柄からして、きっと、彼と絆の強いサウジ人も多いことだろうと思った。残念なことに彼は沙漠のサソリからは最も嫌われている存在であり最優先の攻撃対象だった。

そこに、オバイドが出来上がった書類を抱えて帰って来た。サウジでは、支店長自らが出かけて行って仕事を進めてしまうことが普通だった。その限りでは、サウジの事務処理能力は高いと言える。

慎太郎と笠原は、じきにリヤド支店を去ることが出来た。

ラマダン明けにはイード・ル・フィットル(断食明けの祭・小祭礼)が行われ、各家庭では、親類縁者、友人、知人などが集い大宴会を開く。

街は買い物客でごった返しになる。日本のお正月のような賑(にぎ)やかさだ。

リヤドもお祭り気分で沸き返っていた。

そんな中でも治安当局の捜査が秘密裏に行われ、祭礼の初日の一月二五日には治安部隊がテロリストの隠れ家を急襲した。

治安部隊が隠れ家に踏み込んだ時、中には二人のテロリストがいた。一人は銃で応戦したために射殺され、もう一人は観念して持っていた手榴弾を爆発させ自殺した。

この時、治安部隊は、トラックを押収したが、そこには既に一トンを上回る爆発物が仕掛けられていた。トラックには、国家警備隊のマークが付けられており、死亡したテロリスト

は二人とも国家警備隊の制服を着ていた。八日にムハヤ・コンパウンドを襲撃したテロリストも、国家警備隊の車両を偽装し、その制服を着ていたため、国家警備隊の検問所を容易に通過したとのことであった。今回も危うく同じような自爆テロを実行されるところだった。隠れ家からはこの他にも一トンを上回る爆発物が見つかった。

慎太郎は、このようなサウジの治安対策の進展を予想通りと考えていたが、それを出し抜くような沙漠のサソリの動きに強い懸念も感じていた。また、サウジ人と話す機会を持つ度に意外な事実気が付いた。

若者達の中には、イラクで活動する米軍の行動に怒りを示し、テロリストの行動に共鳴を感じているものが大勢いたし、一般のサウジ人の間にさえ反米感情が広まっていたのだ。

慎太郎はその事実を重苦しく受け止めていた。

アル・ファイサリア・ホテルとファイサリア・タワーの入口ロビーは大きなガラスのドアで隔てられているだけで簡



単に出入りが出来た。そのため、ホテルの中にも数人の警備員が居たが、このガラスドアの近辺にも、いつも警備員が一人立っていて出入りする人間に目を光らせていた。

ドアの向こうのファイサリア・タワーの入口ロビーには無数の警備員とともに自動小銃を持った兵士が何人か見られた。

ホテルの玄関、タワーの入口ロビーは、隣接するアル・コザマ・センター、ファイサル・ファウンデーションの本部ビルそして、日本で言えば銀座のようなファイサリア・モールという大ショッピングセンターと三階程度の高さでつながっていた。一般の道路からこのように高く離れていることは、それ自体が治安の高いことを示していた。

ファイサリア・モールなどの周囲の建物とは、総ガラス張りの渡り廊下で結ばれていて、その通路にはやはり警備員と兵隊がいた。

兵隊には気軽に話し掛けたり挨拶は出来ないが、警備員はファイサリア・グループから雇われていたこともあって、すぐに顔見知りとなり気楽に挨拶を交わすようになった。

慎太郎は様子を見ながら少しずつ行動半径を広げていった。その都度、最初は相当の緊張感を持って望んだが、思い切って出かけ、何事も無いことが分かる度に緊張感がやわらいで行った。

ファイサリア・タワーの入口ロビーから連絡通路に出て左に行けば、ファイサル・ファンデーションの本部ビルとアル・コザマ・センターで、右に行けばファイサリア・モールだった。

ファイサリア・モールの出入り口では兵隊、ダークスーツの制服を着た警備員が双方向の無線電話機を持って通行人を見張っていた。

「アツサラーム・アレイコム」

慎太郎は、顔見知りの警備員に挨拶をしてモールに入った。

「アレイコム・サラーム」

警備員もこの時ばかりは微笑みながら、慎太郎に応えた。

慎太郎は、周囲に細心の注意を払いながら歩き始めた。

モールの中は、大勢の買物客で賑わっていた。皆、慎太郎を見かけると笑顔で挨拶をしてくる。それは前の赴任の時と変わりがなかった。見ず知らずの人間が親しげに挨拶をしてくるなどというのは、日本ではほとんど考えられないことだが、イスラム世界では普通だ。治安が悪化していることとは関係なかった。慎太郎はいちいち挨拶をり返している内に大分馴染んできた。それで、緊張感が少し和らいだ。

ただ、この一見平和そうに見えるモールにも突然テロリストが侵入してきて機関銃を撃ち放さないとも限らない。慎太郎は警戒心を完全に緩める分けには行かなかった。

買い物客の服装はトープとアバヤがほとんどだった。サウジ人は子供を除き皆そうだったし、外国人は男性のみ洋服でいられたが、女性は皆アバヤで身を固めなければならなかった。白のトープと黒のアバヤが溢れて、まるで色が失われた世界にいるようだ。それと海外の一流ブランドのきらびやかな婦人服がぎっしりと並べられたショッピングウィンドウの華やかな彩りとは全く対照的だった。

慎太郎にはそれが調和が取れていないように思えて仕方がなかった。

入口を入ったばかりの、アル・ファイサリア・ホテルの玄関と同じ高さのプラザレベル(モールの三階)には、スポーツウェアのナイキ、リーボックなどの店もあった。一流ブランドの洋服屋、靴屋、おもちゃ屋なども所狭しと並んでいた。また、ソニーの代理店もあり、大勢の人々が大型テレビ、パソコン、デジカメ、プレイステーションなどを見ていた。その隣にはミュージック・ショップがあり、内外のクラシックからピュラーまでのカセット、CD、DVDなどが並べられ大勢の若者達でごった返していた。

その光景は日本の豪華なショッピングモールと同じだった。慎太郎はリヤドの変貌振りに驚かされていた。

慎太郎は、恐る恐るその三階を歩き続けた。奥にはフードコート(飲食店街)があっアアラブ、中華、インド、そして欧米など世界各国の料理店が軒を連ねていた。美味しそうな匂いがしてきた。試したかったが後の楽しみに残しそのまま入

口に引き返した。

ざっと歩いただけだったが、いつテロリストが襲ってくるかも知れないと、ずっと緊張して歩いていたせいで、レジデンスに戻ると、どっと疲れが出た。

翌日は、モールの別の階を覗いて見ることにした。

慎太郎は、また、警備員と挨拶をしてモールに入った。

すると、突然、慎太郎の後ろで騒ぐ声が聞こえた。何が起こったのかと緊張して振り向くと、警備員がジーンズにジャンパー姿の若者達と何やら言い争っていた。暫らくすると、話し合いが着いたようで、若者達はモールの中に入って来た。

“怒れる若者達”という風で慎太郎の脇を通り過ぎて行った。

慎太郎は、警備員のところに戻って何があったのかと聞いたところ、一応、身元チェックをしただけとのことだった。

モールで騒動を惹き起こしそうな人間が入ることを拒否するのが彼の役目だが、彼等は、とても入ることを拒めるよう

な相手ではなかったという。有力部族に属する裕福なサウジ人の子息達だった。慎太郎は一目見て彼等をサウジ人だろうと思ったが、ジーンズ姿のサウジの若者がいるのは信じられないことだった。

こんなところにもモールらしさがあるのかと慎太郎は思った。ファイサリア・モールはイスラムの戒律の厳しいリヤドでも幾分戒律が緩いところと聞いていた。それは、ムタワ（宗教警察）嫌いの有力プリンスがモールに関係していてもタワがモールに足を踏み入れ難いためだった。

若者達が集まるミュージック・ショップの辺りにさつきモールに入って来たサウジ人の若者の集団がいた。その内の二人がすつと、アバヤを来た若い女性の方に近づいて何やら話し掛けていた。知り合いのようには見えなかったが笑い合うと、手早く、メモを取り交わしていた。

別の二人は、遠くのアバヤを着た女性の方に歩いて行ったが、そちらからはアバヤを着た女性の罵声（ばせい）が聞こえてきた。

慎太郎が不審な顔をしていると、通りすがりのアラブ系の外国人男性が微笑みながら、慎太郎に話し掛けてきた。

「アツサラーム・アレイコム」

「アレイコム・サラーム」、と慎太郎は応じた。

「奴等は、ナンパをしているところさ。片方の二人は交渉成立で、携帯電話番号を交換出来たが、片方の二人は振られたという分けだ。振られた方の一人が振った女性のお尻に触ったものだから、女性が怒って殴りかかったのさ。サウジ女性は強いからね」

そう言うと、その男はその場を立ち去って行った。男の説明を聞かなければ、慎太郎には何が起こっていたのか全く分からないところだった。アラブ人は根っから親切だ。

モールの中は、どこに行っても、イスラムの国らしい和気あいあいとした雰囲気溢れていた。

中には、日本人かと聞いて来る者もいたが、日本人は沙漠のサソリの攻撃対象となっているので、慎太郎は用心して、

「日本人ではない、中国人だ」などと応えたりしていた。

最初は、いつテロリストが侵入して来るかも知れないと緊張感を持ちながら歩いていたが、何事も無く回数を重ねるとその緊張感は次第に和らいでいった。歩いているのが楽しくなってきた。

モールでは、黒いヒジャブの一部を開け、まるで御高祖頭巾(おこそずきん)のように、眼と鼻だけ出している女性もいた。彼女等は、皆目鼻立ちがくつきりとしていて絶世の美人だった。また、若い女性達の中には真っ黒なアバヤの隅や裾などに鮮やかな色の刺繍を入れているものもいた。蝶や花などの刺繍が多かったが、中にはどういう分けか、“春”などの漢字を縫い付けているものもいた。彼女等はその字の意味を知っているとは到底思えなかった。ファッションの一つなのだろうが、こんなところにも若者達の新たな兆候が感じられた。ムタワがこれを見たら彼女等を咎(とが)めるのではないだろうかと心配になるくらいだった。

慎太郎は、女性達には、自分から笑いかけたり話しかけた



りしないように心掛けたが、彼女等もアラブ人の男性と同様に大体愛想が良く慎太郎に笑いかけて来たり、中には挨拶して来たりしたものもいた。その大きな目の微笑みは印象的だった。クレオパトラの微笑……

思わず話したくなるような時もあったが、イスラムの厳しい戒律を思い出して思い止まった。本当に美人ばかりだ。もっとも、戒律を守り黒いヒジャーブで完全に顔を隠したままの女性もいたので、美人ばかりとは言いい切れないが……

モールの店員は、ほとんどがアラブ系の外国人、フィリピンなどの東洋系外国人の出稼ぎ労働者だった。彼等も皆愛想は良かった。

慎太郎は、少しずつ慎重にモールの中での行動半径を広げていった。そして、少しずつ広がってゆく安全と思われる範囲内で徐々に楽しい自由な雰囲気味わうことが出来るようになっていった。

慎太郎は、毎日のようにモールに出かけた。